

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2016年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名			
	文学部・教授		前田良三 印			
研究課題	ドイツ文化研究における解釈学のメディア論的転回——国際的・学際的研究基盤の構築					
研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2017年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名			
	立教大学・文学部・教授		前田良三（研究代表者）			
	立教大学・文学部・教授		副島博彦（研究分担者）			
	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授		新野守広（研究分担者）			
	立教大学・文学部・教授		井出万秀（研究分担者）			
	立教大学・文学部・教授		坂本貴志（研究分担者）			
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授		浜崎桂子（研究分担者）				
研究期間	2016年度 ～ 2017年度					
研究経費※ (上段：支出金額)	2016年度		2017年度		年度	総計
	2,933,250	円		円		2,933,250 円
(下段：採択金額)	3,000,000		2,265,000			5,265,000 円

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクト研究は、文学・文化研究の根幹をなす解釈行為を、現代のメディア技術、とりわけデジタル・アーカイブ（以下 DA）と情報のネットワーク化との関連において捉え直し、DA は人文学にいかなる可能性を提起するのか、またそれによって人文学がどのように変容してゆくのかという問いを、ドイツ文化研究の各分野に即して具体的に考究しようとするものであり、**α**) DA を自覚的かつ分析的に利用することで文化研究においてどのような新たな解釈行為が行われ、どのような研究上のパラダイムが発生するかを実践研究する実証的研究と、**β**) これを学問史およびメディア理論の枠組みのなかに位置づけて考察する理論的研究、さらに **γ**) 個別の研究事例に即して DA の存在をインデックス化し、これをデジタル情報として公開することを 3 つの柱として進める。研究は海外の研究協力者および他分野（宗教学、日本学など）との密接な連携のもとに行い、国際的かつ学際的な研究基盤の構築を目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[デジタル・アーカイブ] [解釈学] [脱人間化/再人間化]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2016 年度に採択された研究経費が申請額 (3,700 千円) から 3,000 千円へと 20%弱減額されたため、当初計画を見直す必要に迫られた。具体的には、年 2 回の研究会の内 2017 年 1 月に予定されていた研究会を 2 月に開催した国際シンポジウムに合わせて行うとともに、講師謝礼金をもっぱら国際シンポジウムの発表者にのみ支出することとした。また、シンポジウム開催に直接かかわる人件費以外の人件費を削除したため、上記 γ) (DA インデックスのデジタル情報化) の作業は 2017 年度に持ち越すこととした。以下、時系列に沿ってプロジェクト全体の研究経過を概観し (①～④)、それに続いて研究代表者・分担者が個別に遂行した研究内容について略述する (⑤)。

① 2016 年 7 月の第 1 回研究会は、上記 α) の実証研究部分を中心として、講演、討議を行った (2016 年 7 月 20 日、立教大学池袋キャンパス 5 号館)。講師として、当初予定していた藤井明彦氏 (早稲田大学) に代わり、海外研究協力者である Albrecht Classen 教授 (アリゾナ大学) に、現代の欧米メディア文化 (映画・アニメーションなど) における

中世文化の受容の変化についての報告をお願いした。クラスセン教授の報告では、近年欧米のメディア文化において顕著な現象である中世への関心の高まりが、中世の生活文化・身体文化の視覚的・音声的データへのアクセスが DA によって飛躍的に容易になった事実と密接に関連している点が指摘されるとともに、そこでは伝統的な解釈モデルが一義的権威性を保つことはないにせよ、非言語的データを映像のナラティブへと編集するに当たって、規範として機能し続けていることが確認された。また、この研究会では、2016 年度に研究代表者・分担者が海外で行う研究資料調査・蒐集の計画の確認が行われ、2017 年 2 月に開催する国際シンポジウムのテーマ、発表者、日程などの詰めが行われた。

② 次に 2016 年 8 月にソウルで開催された国際学会アジア・ゲルマニスト会議 (Asiatische Germanistentagung) に研究代表者前田および分担者井出、坂本が参加し、個別の研究発表を行うとともに、同学会に招聘された海外研究協力者 Jürgen Fohrmann 教授 (ボン大学) と合同で研究上の打ち合わせを行い、ボン大学・立教大学の今後の研究協力体制について意見交換を行った (8 月 23 日～26 日、Chung-Ang University)。

③ 2017 年 2 月に立教大学で国際シンポジウム「Interpretation nach der „digitalen Wende“. Internationales Symposium des SFR-Projekts der Rikkyo-Universität, Tokyo (「デジタル・ターン以降の解釈学」) を開催した (2 月 25 日～27 日、太刀川記念館 3 階多目的ホール)。参加者と発表テーマは以下の通り (発表順)。前田良三 (立教大学、研究代表者) 「Digital Humanities? Interpretation nach der digitalen Wende. Einführung zum Symposium (導入発表: デジタル人文学? デジタル・ターン以降の解釈学)」; Michael Mandelartz (明治大学、ドイツ文学) 「Vom Verschwinden der Literatur in den Datenbanken. Zum Verhältnis von analoger und digitaler Literaturwissenschaft (データ・アーカイヴにおける文学の消滅。アナログ文学研究とデジタル文学研究の関係について)」; Thomas Wegmann (インスブルック大学、ドイツ文学) 「Zwischen Youtube, Bühne und Buch: Zur Interpretation literarischer Werke im Zeitalter ihrer medialen Hybridisierbarkeit (ユーチューブと舞台と書物のはざままで。メディア・ハイブリッド化の時代における文学作品解釈について)」; Thomas Schwarz (立教大学・ドイツ文学) 「Auswirkungen der Digitalisierung auf begriffsgeschichtliche Studien (デジタル化が概念史研究に及ぼす影響について)」; 二藤拓人 (立教大学大学院、日本学術振興会研究員、ドイツ文学) 「Interpretation und Fragment bei Friedrich Schlegel. Zum Widerstand eines Schriftmediums um 1800 (フリードリヒ・シュレーゲルにおける解釈とフラグメント。1800 年前後における書字メディアの抵抗)」; 馬場大介 (立教大学大学院、ドイツ文学) 「Digitalarchiv und Quellenforschung. Ein Beispiel der Studie von Karl Florenz (デジタル・アーカイヴと資料研究。カール・フローレンツ研究を例として)」; 井出万秀 (立教大学、ドイツ文学) 「Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks. Warum der ‚Druck‘ ‚abgeschrieben‘ wurde. - Eine Analyse der digitalen Handschriften - (メンテリン版清書の書写。なぜ印刷本が筆写されたのか。デジタル手稿版分析)」; Jörg Robert (テュービンゲン大学、ドイツ文学) 「Journalpoetik und Distant reading: Kleists "Erdbeben in Chili" und Cottas "Morgenblatt für gebildete Stände" (雑誌の文学論とディスタンス・リーディング。クライスト『チリの地震』とコッタ『教養階級のための朝刊』)」; 坂本貴志 (立教大学、ドイツ文学) 「Weltanschauung und Archiv - Eine komparatistische Untersuchung über enzyklopädische Gedanken bei Johann Christoph Gottsched und Yamagata Banto - (世界観とアーカイヴ。ヨーハン＝クリストフ・ゴットシェートと山片蟠桃における百科全書的思考の比較文化研究)」; 久保田浩 (立教大学、宗教史) 「Die religionswissenschaftliche "Medialisierung" der "Religionsgeschichte" (「宗教史」の宗教学的「メディア化」)」; Robert Horres (テュービンゲン大学、日本学) 「Die mediale Repräsentation der Welt: Ontologien und digitale Forschungsumgebungen (メディアによる世界の表彰。存在論とデジタル研究条件)」。

研究【経過・成果】の概要 つづき

発表は第一日目が主として理論研究(上記β)の領域における議論の精緻化と分析概念の厳密化をめぐるものであり、第二日目が個別の実践研究(上記α)におけるDAを前提とした研究事例にもとづくものとなっている。なお、この国際シンポジウムには、研究分担者の新野守広、浜崎桂子も討論者として積極的に参加している。さらに国際シンポジウムは、ドイツ語での集中的討議を行うという趣旨から、あえて公開のシンポジウムとはしなかったが、ドイツ文学やメディア研究の分野での研究協力者等に事前に連絡することにより、2日間で延べ60名以上の学外からの参加者があったことを付記する。

④ シンポジウムにつづく第三日目には、本来1月に予定していた2016年度第二回目の研究会を行った。ここでは、シンポジウムへの海外参加者とプロジェクト研究のメンバーとの個別の打ち合わせとワークショップを並行して行い、シンポジウムの内容を踏まえた今後の研究協力における具体的なテーマの詰めを行った。講師として予定されていた大宮勘一郎氏(東京大学)にも参加いただいた。

⑤ 2016年度研究代表者・分担者は個別に次の研究を行った。1) 前田良三: 2016年10月ドイツ(ボン, フランクフルト, ケルン, フライブルク, テュービンゲン) およびオーストリア(グラーツ)で資料調査・蒐集を行い、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団国際シンポジウム「Weltliteraturen (さまざまな世界文学)」に参加、シェイクスピアの日本受容と海外におけるその再受容について、舞台美学・演出関連データのDA化の流れとの関連で報告した。また、フライブルク大学においてDAおよびデジタル人文学に関する資料の調査を行い、さらにテュービンゲン大学で日本学のKraus Antoni, Robert Horres, Monika Schrimpf教授と研究協力体制をさらに緊密化するための具体的な研究テーマについての打ち合わせを行い、ドイツ文学研究所のJörg Robert教授とDAがもたらす解釈行為の脱人間化(脱「主体」化)についての意見交換を行った。2) 副島博彦: 2016年8月~9月, ドイツ(ヴッパータール, ケルン, ベルリン, ライプツィヒ)でダンス・アーカイヴ調査, 2017年1月, 兵庫県立芸術センターで薄井憲二バレエ・コレクションのアーカイヴ化についての聞き取り調査、および、同コレクションの資料調査, さらに3月にはソウルで陸完順(韓国現代舞踊振興会理事長)氏へのダンス・アーカイヴに関する聞き取り調査とLGアート・アートセンターにおけるコンテンポラリーダンスの現地調査を行った。3) 新野守広: 2017年1月, ドイツ(ベルリン自由大学)において演劇資料のアーカイヴ化に関する文献調査を行った。4) 井出万秀: 2017年2月ドイツにおいて中世写本関連のDA化の進行状況の調査を行った。5) 坂本貴志: 2016年11月大阪大学, 2017年1月名古屋大学においてデジタル人文学の研究資料の調査を行った。6) 浜崎桂子: 2017年3月, ソウル国立大学で今後の共同研究の準備のための意見交換を行った。なお、研究代表者・分担者が2016年度に発表した業績は、次の「研究発表」を参照されたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① -前田良三「類比(アナロジー)的思考の系譜——エルンスト・カッシーラーの Kulturanthropologie 再考」, 『ヘルダー研究 Herder-Studien』第21号, 2016年, 71-107頁.
 -Maeda, Ryoza: Wissenschaftskultur und Wissenschaftsgeschichte: Zu einer neuen Wissenschaftsgeschichtsschreibung der Germanistik in Japan. In: Tilmann Borsche, Teruaki Takahashi, Yoshito Takahashi (Hg.): Japanisch-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen. contraste: Studien zur deutsch-japanischen Kulturkomparatistik, Band 1, Paderborn: W. Fink 2016, S. 59 - 69.
 -副島博彦「ピナ・バウシュとタンツテアター」, ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団『カーネーション』公演プログラム, 彩の国さいたま芸術劇場, 2017年, 13-15頁.
 -新野守広「不在の演劇—演劇と音楽の境界を超えるハイナー・ゲッベルスの活動—」, 立教大学異文化コミュニケーション学部紀要『ことば・文化・コミュニケーション』第9号, 2017年, 53-66頁. -坂本貴志「普遍的自然史の構築: キルヒャーとヘルダーの「古代神学」」, 岩波書店『思想』1105巻, 2016年5月, 94-113頁.
 -Hamazaki, Hamazaki: Japans Kolonialismus und die Südsee. Atsushi Nakajimas Erfahrungen auf den Inseln Mikronesiens. In: Johannes Görbert / Mario Kumeckawa / Thomas Schwarz: Pazifikismus. Poetiken des Stillen Ozeans. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2017, S. 343-358.
 -Hamazaki, Keiko: Zwischen Ethnographie und Literatur. „Dichte Beschreibung“ von Deutschland. In: Teruaki Takahashi / Yoshito Takahashi / Tilman Borsche (Hg.): Japanisch-Deutsche Diskurse. Zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen. Paderborn (Wilhelm Fink) 2016, S. 163-173.
- ② -浜崎桂子『ドイツの「移民文学」—他者を演じる文学テクスト』彩流社, 2017年, 351頁.
- ③ -国際シンポジウム「Interpretation nach der „digitalen Wende“. Internationales Symposium des SFR-Projekts der Rikkyo-Universität, Tokyo (「デジタル・ターン以降の解釈学」)を開催した(2月25日~27日, 太刀川記念館3階多目的ホール).
- ④ -Maeda, Ryoza: »Weltliteraturen«: Wie wurden Shakespeare und Cervantes (nicht) zu den Klassikern der modernen japanischen Literatur. Sektionsvortrag, gehalten auf dem 6. Bonner Humboldt-Preisträger-Forum „Weltliteraturen – Meisterwerke: Shakespeare und Cervantes 2016“, Bonn, 12. – 15. Oktober 2016, am 13. 10. 2016.
 -Soejima, Hirohiko: Language and Choreography – The Case of Pina Bausch. 28 January 2017, in: International Conference, Claiming Contemporaneity, 26—28 January 2017, Kampnagel, Hamburg, Germany.
 -坂本貴志「共同討論問題提起II『バハオーフェンとニーチェにおける文献学から哲学へのロマン主義的転回』」, 日本ヘルダー学会春季研究発表会, 2016年05月, 立教大学.
 -坂本貴志「「世界の複数性」の投影としての「オリエン特」—ゲーテ『ファウスト』の「母たち」と『西東詩集』—」, 日本シェリング協会第25回大会クロス討論I「シェリングの時代におけるオリエン特観」, 2016年07月, 京都産業大学.
 -Sakamoto, Takashi, „Mütter“ und Petron von Himera - Eine Untersuchung über gedanklichen Hintergrund von Goethes Faust -, Asiatische Germanistentagung 2016 Seoul, Chung-Ang University.